束芋 断面の世代

Tabaimo

横浜美術館開館20周年記念展

断面 DANMEN

2009年12月11日(金)—2010年3月3日(水)

アーティスト活動10年目。束芋が切り開く、新しい世界の断面。

現代美術家・束芋(たばいも)は、1975年、兵庫県生まれ、長野県在住。大学の卒業制作として制作したアニメーションによる映像インスタレーション《にっぽんの台所》がキリンコンテンポラリー・アワード1999最優秀作品賞を受賞、デビュー間もない2001年には、第1回横浜トリエンナーレに最年少で出品したことでも話題になりました。その後、サンパウロ・ビエンナーレやヴェネツィア・ビエンナーレなど、数々の国際展やグループ展に出品を続け、2006年には原美術館、パリのカルティエ財団で個展を開催するなど、世界的な評価を受けてきました。

デビューから10年、束芋は、再びこの横浜で、5点の大型映像インスタレーションを発表します。本展は、出品作全てが新作という、かつてない規模の個展です。

《団断》(イメージ) 2009年 Courtesy the Artist and Gallery Koyanagi

横浜美術館

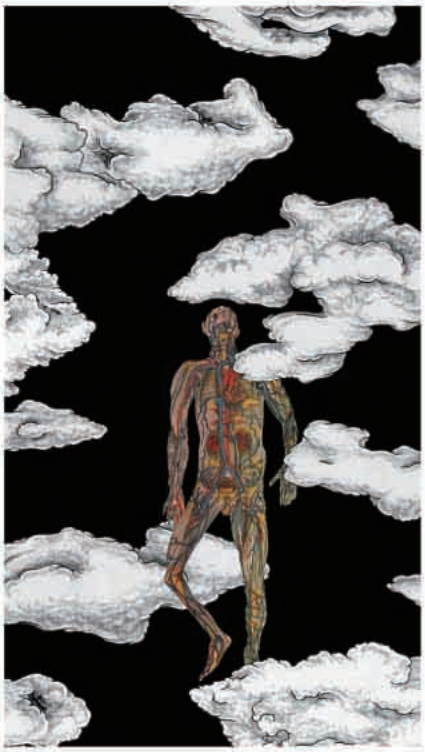
束芋のアニメーション映像は、おびただしい数の手描きのドローイングをもとに、独特の色をのせて生み出されます。そのアニメーションは複数の画面を組み合わせた立体的な映像空間として構成されます。

30代半ばを迎える束芋が本展でテーマにするのは、自らの世代感と世界観そのものです。近年の作品で束芋は、現代の典型的イメージをつなぎ合わせるような作風から、指、髪の毛、内臓などをモチーフとする、より内的な作品へと表現の幅を拡げてきました。本展で束芋は、そこからさらに展開し、自分を取り巻く世界、昭和を知る最後の世代である同世代の感覚、異なる時代に生きた同年代の人々を見つめ直し、新たな作品世界を切り開いていきます。

本展では、そうした束芋自身をめぐる世界が、集合住宅という形で象徴されます。同じ間取りの部屋に、全く異なる生活が連なっている集合住宅。そこに包丁をいれるように、束芋は集合住宅の「断面」を切り出し、現在と過去が渾然一体となった様々な人生をえぐり出していきます。続く作品群では、人や自然といった生ある物の「断面」へと踏み込んでいき、より深遠な世界像を結んでいきます。

本展では、束芋の作品世界をより多角的にご紹介するイベントも多数開催いたします。トーク・イベントに加えて、束芋と同世代のダンサー、ミュージシャン、劇団など、クリエイターたちとのコラボレーションによるダンス・ライブや演劇公演を開催します。

アーティスト活動10年を迎える束芋が作り上げる、世界の「断面」をお楽しみください。



《ちぎれちぎれ》(イメージ)　2009年
映像インスタレーション
Courtesy the Artist and Gallery Koyanagi

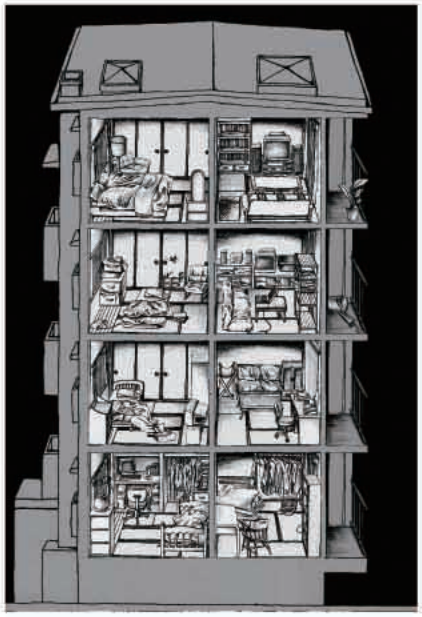
撮影:稲垣尚志

束芋

1975年兵庫生まれ、長野在住。1999年、京都造形芸術大学卒業。アーティスト名「束芋」は、本名が田端で、さらに次女であったことから「田端の妹」、略して「タバイモ」と呼ばれていたことに由来する。1999年、大学の卒業制作として制作したアニメーションによる映像インスタレーション《にっぽんの台所》が、キリンコンテンポラリー・アワード1999最優秀作品賞を受賞。2001年、第1回横浜トリエンナーレで最年少の作家として出品。以後、2002年、サンパウロ・ビエンナーレ、2006年、シドニー・ビエンナーレ、2007年、ヴェネチア・ビエンナーレ(イタリア館)など数々の国際展やグループ展に出品を続け、日本を代表する映像インスタレーション作家の一人として注目を集めている。2006年、原美術館、パリのカルティエ現代美術館で個展を開催。国内公立美術館では、今回が初めての個展となる。

【出品作品紹介】

本展では、新作の映像インスタレーション5作品に加えて、吉田修一著の新聞小説『悪人』のための挿絵原画50枚を、初めて全点展示公開します。それぞれの作品は、立体的な映像インスタレーションとして構成され、横浜美術館のグランドギャラリー（エントランスホール）と企画展示室全室を使う、かつてない規模の展示となります。
ここでは、それら出品作品について、束芋本人の言葉をご紹介します。
（カタログ所収、作品ステートメントからの抜粋）



《団地層》（イメージ）　2009年
映像インスタレーション
Courtesy the Artist and Gallery Koyanagi

団地層

エントランスで展開するこの作品は、「断面の世代」展の目次的作品。個人の趣味によって集められた家具たちはそれぞれの部屋に押し込められ、それらが部屋の所有者のキャラクターを浮き上がらせる。

悪人（新聞小説『悪人』挿絵原画）

新聞小説『悪人』（吉田修一著）は'人型'を丁寧に浮き上がらせる彫刻的な作品だと感じている。
文章から立ち上がる空気を本の間にはさんで作る押し花のように、二次元の紙の上に定着させることに努めた。

《悪人》（部分）　2006-07年
墨・和紙
Courtesy the Artist and Gallery Koyanagi

《油断髪》（イメージ）　2009年
映像インスタレーション
Courtesy the Artist and Gallery Koyanagi

油断髪

新聞小説『悪人』の登場人物、金子美保がモチーフ。
「油断髪（ゆだんがみ）」は金子美保の人生が物語と交わった断面から、金子美保の見えていない人生を想像し作り上げる映像インスタレーション。繰り返される断絶を表現したい。